



Title	失われた「共通言語」を再創造する：陶晶孫の亡命期テキストにおけるノスタルジアの言語実践
Author(s)	呉, 穎濤
Citation	アジア太平洋論叢. 2026, 28(1), p. 23-37
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/104299
rights	This article is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-NoDerivatives 4.0 International License.
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

失われた「共通言語」を再創造する —陶晶孫の亡命期テキストにおけるノスタルジアの言語実践—

Reconstructing the Lost “Common Language”: The Linguistic Practice of Nostalgia in Tao Jingsun’s Exile Texts

呉 穎濤*

NG Richard Wing To

Abstract

This essay addresses the problem of cultural rupture and the reconstruction of a “common language” in the late exile literature of Chinese writer Tao Jingsun. After fleeing the political terror of Taiwan for postwar Japan, Tao faced the collapse of the Sino-Japanese intellectual foundation and the complex legacy of his own historical entanglement with Japanese imperialism.

This essay reads Tao’s final Japanese writings—specifically his posthumous collection Testament to Japan—by examining his literary practice as the “performance of an exile.” This performance operates through a strict non-belonging stance, a fluid oscillation between solemn classical Chinese vocabulary and mundane everyday language, and a calculated use of humor and satire. By employing a strategic “nostalgia for the Meiji era” not as imperial regression but as a critical apparatus, Tao attempts to revive the dialogic openness that preceded Japan’s imperial expansion. By showing how Tao shifts the focus from macro-political grand narratives to the micro-ethics of daily life and interpersonal communication in his final fiction, this essay aims to shed light on the tactics of literary intervention by individuals who exist between rigid national identities, thereby providing insight into how a shared cultural vocabulary can be recreated in the aftermath of historical trauma.

Keywords: Tao Jingsun, Exile, Common Language, Meiji Nostalgia, Postwar Japan

I はじめに

本稿は、作家・陶晶孫（1897-1952）がその最晩年、1950年から1952年にかけて戦後日本で執筆し、死後に遺稿集『日本への遺書』として編まれた一連の日本語作品群を、周到に企画された文学的实践、すなわち「亡命者のパフォーマンス」として読み解くことを目的とする。分析の主たる対象とするのは、同書に収められた「淡水河心中」「セントラルサプライの泥棒」「漢文先生の風格」の小説三篇、および関連する随筆である。戦後の混乱と文化的断絶のただ中で、陶はいかにして日本人読者の深い共感と呼ぶ批評的言説を構築し得たのか。この問いに対し、本稿は彼の文学行為が単なる心情の吐露ではなく、明確な意図を持つパフォーマンスであったと論じる。ここでいう「パフォーマンス」とは、以下の三つの要素が緻密に連動する表現戦略を指す。第一に、日本・中国・台湾いずれの政治的主体にも完全に同化することなく、批評的な距離を保つ不帰属の立場。第二に、荘重な古典語彙（漢文・儒教）と卑近な日常言語との間を自在に往還する語彙。そして第三に、日本人読者の文化的な読解の習性を前提とし、その期待を巧みに利用・転倒させる「ユーモアと風刺」という受容設計である。

陶晶孫の亡命期の執筆活動に関しては、これまでも様々な角度から光が当てられてきた。武継

* 大阪大学大学院人文学研究科・招へい研究員

平(2013:13-22)による緻密な版本考察は、テキストの成立過程を明らかにし、濱田麻矢(1996:235)は日中文化の「混血児」という視点からその独自性を評価した。また、黄英哲(2016:109-142)は小説「淡水河心中」の分析を通じ、陶が「越境者」の視点から戦後台湾社会の複雑な様相を描き出したことを論じている。これらの先行研究は、陶晶孫のテキストが持つ多文化的な性格を明らかにする上で重要な貢献を果たしてきた。

中でも、本稿が特に重視するのは、近代日中文学の精神的交流を究明した伊藤虎丸(1995:235)と、現代の中国文学研究を牽引する鈴木将久(2012:261)が提示した論点である。彼らは、戦前の日中文学の間には漢文的教養を基盤とした「共通の言葉」が存在し、戦後、陶の作品が日本人読者の間に生んだ「共感」や「共鳴」は、その基盤の上に成り立っていた可能性を示唆した⁽¹⁾。なお、伊藤および鈴木指摘する「共通言語」とは、主に明治期から戦後へと通底する思想的課題や語彙の共有を指すが、本稿ではこの視座を継承しつつ、定義の射程をより広げて用いる。すなわち、そうした思想的共有を可能ならしめた基盤としての「漢字」と「漢文」、およびそれらを血肉として成立した「近代日本語」といった言語的側面、ならびにそれによって形成された教養の共有そのものに重点を置く。この視座は、戦争という巨大な断絶を越えて存続する文化的な連続性を捉える上で極めて重要である。

しかし、本稿は、この「共鳴」が決して自然発生的なものではなく、むしろ陶晶孫自身が「亡命者」という極限状況の中で、文学的パフォーマンスを通じて主体的に再構築したものである点にこそ、彼の文学の本質があると主張する。戦争によって、かつて漢文的教養に裏打ちされた相互理解の基盤、すなわち「共通言語」はその自明性を失った。それゆえに陶は、この失われた文化的基盤を、「亡命者のパフォーマンス」という文学的实践を介して、自覚的に再構築しようと試みたのである。先行研究の多くが彼の作品群を随筆として包括的に論じることで、特に遺稿集『日本への遺書』に収められた小説「セントラルサプライの泥棒」や「漢文先生の風格」が持つフィクション性、すなわち意図的に構築された場面設定や会話、語りの操作が持つ戦略的な意味合いを見過ごしてきた。

ここに本稿の独自性がある。すなわち、形式(小説)、立場(亡命者)および語彙(漢文)という三つの要素が交差する点に分析軸を置き、「落第した秀才日本」や「中日友好のために」といった随筆で理念的に示された「アジアに戻る」といった文明批評が、小説という形式における具体的な場面の演出を通じていかにしてリアリティを獲得するかを解明する。次いで、彼の用いた「明治時代へのノスタルジア」を、単なる懐古ではなく言語実践を支える批評装置として位置づける。

本稿の構成は以下の通りである。まず、陶晶孫の複雑な経歴、特に台湾から日本への逃亡が彼の「亡命者」としての立場をいかに決定づけたかを概観する。そして、彼が「傍観者」の視点から展開した戦後日本批評の特質を分析する。次に、その批評の背景にある「明治へのノスタルジア」と「帝国主義日本との葛藤」という二つの精神的源泉を考察する。そして、小説二篇の精読を通じ、漢文を媒介とした日中交流の可能性が、生活というミクロな次元でいかに再創造されようとしたかを論証する。

II 陶晶孫の経歴と日本への逃亡

本稿が論じる「亡命者のパフォーマンス」は、決して抽象的な文学上の立場ではない。それは、作家・陶晶孫(1897-1952)がその生涯を通じて体験した、絶えざる越境と文化的・政治的葛藤の必然的な帰結であった。彼の複雑な個人史は、近代日中関係史の縮図そのものであり、その軌跡を丹念に追うことは、彼の文学作品に込められた多層的な意味を解読するための不可欠な前

提となる。

1. 明治日本における人格形成と「共通言語」の獲得

陶晶孫のアイデンティティの根幹をなす原風景は、明治末期から大正初期にかけての日本にあった。1897年に江蘇省無錫の秀才の家に生まれた彼は、明治大学で法律を学ぶこととなった父の陶廷枋とともに、1906年、9歳で来日した⁽²⁾。東京神田の錦華尋常小学校に入学して以降、東京府立第一中学校、第一高等学校と、当時のエリートコースを日本人と共に歩み、完全な日本教育を受けた。この時期の経験は、彼のアイデンティティに決定的な刻印を残した。

彼は日本でネイティブと遜色ない日本語を身につけたが、より決定的だったのは、当時の国文教育の中核をなした漢文の素養である。戦時下の上海で作家・大鹿卓(1948:54)に「僕たちは学校時代に漢文を習つたらう。あのお陰でまだ多少でも古典に親しめる」と語ったように、彼は日本の学校で培った漢文教育を、日中双方の古典へ通じる基盤として強く自覚していた。中国古典文化への敬意がなお濃厚だった明治期の環境で育ったという原体験は彼の日本観を規定し、同時に自らを「漢文を習った最後の世代」と意識させた。この内面的教養は、中国人としての自己と日本人としての自己を結ぶ架橋となり、戦後テキストにおける「共通言語」再生の切実な動機へと結実する。

2. 帝国主義の狭間で——引き裂かれるアイデンティティ

第一高等学校を卒業後、九州帝国大学医学部に進んだ陶は、科学者としての道を歩み始める。しかし、時代が昭和へと移り、日本の大陸への野心が露わになるにつれ、彼の立場は次第に複雑化していった。1931年に上海自然科学研究所の研究員となったが、その設立母体は日本の外務省であり、彼は否応なく日本の「対支文化事業」の渦中に身を置くことになった。

1937年の日中戦争勃発は、彼のアイデンティティを根底から引き裂いた。家族の安全を確保するため日本へ避難させ、自身は孤立した上海に留まり、日本の組織下で活動を続けざるを得なかった。淪陷期(日本占領期)の上海で日中文化協会の一任を務め、1944年には第三回大東亜文学者大会への参加を強要されるなど、彼の経歴は表面上、日本の文化政策に協力した「文化漢奸」と見なされかねないものであった。この経験は、彼に「裏切り者」というそそぎがたい汚名を着せると同時に、いずれの国民国家にも全面的に帰属することのできない「辺境人」としての自己認識を痛切に刻み付けた(吉田 1998:205)。彼の文学における絶妙な距離感や、政治的言説への強い警戒心は、この引き裂かれた経験にその源流を持つ。

3. 台湾への渡航と逃亡の決意

1945年の日本の敗戦は、陶に新たな転機をもたらした。彼は国民政府の命を受け、戦後処理に携わった後、1946年に台湾へ渡り、新設された国立台湾大学医学院の教授に就任した(黄 2016:123)。医学研究に専念できるかに見えたこの地も、しかし、彼にとって安住の場所ではなかった。

当時の台湾は、日本の植民地支配から解放された直後の混乱と、新たに來台した国民党政府による強圧的な統治が交錯する、極めて不安定な社会であった。1947年の二・二八事件は、その緊張を決定的に露呈させる。陶自身は事件当時上海に出張中で難を逃れたが、台湾社会に深く刻まれた傷と不信感を目の当たりにした。彼は講義で日本語を多用し学生から慕われたが、公衆衛生学という学問の性質上、社会の矛盾に触れることを避けられず、常に当局の監視を意識せざるを得なかった。

そして1950年、息子の陶易王が学生運動に関与したことが、一家の運命を決定づける。国民

党政府による知識人や学生への弾圧（白色テロ）が激化する中、陶は自らの過去の経歴（日本への協力、さらには共産党地下活動への関与説も囁かれていた）も相まって、台湾での身の危険を強く感じた（王 1998：47）。彼は周到な準備の末、学術調査を名目に、一家全員での日本への逃亡を決行した⁽³⁾。この劇的な脱出は、彼が物理的にも精神的にも、特定の国家や体制から離脱し、真の意味での「亡命者」となった瞬間であった。

亡命後の日本では、旧知の友人の助けでささやかな職を得ながらも、生計を立てるために本格的な文筆活動を再開する。1952年に55歳でその生涯を閉じるまでのわずか2年余りの期間に、彼は自身の全生涯にわたる思索と葛藤を凝縮させたかのような作品群を遺した。しかし、この逃亡の背景には、国民党政府による白色テロの血塗られた記憶が存在したことを看過してはならない。息子たちの回想によれば、当時の台湾では「学生の死体が時々淡水河から浮かび上がった」といい、陶自身もその理不尽な暴力に深い悲痛と怒りを覚えていたという⁽⁴⁾。この、イデオロギーの名の下に個人の生命が容易に抹殺される現実を目の当たりにした経験こそが、彼の文筆活動の根底を規定することになる。本稿が分析対象とするテキストは、まさにこの「亡命」という最終的な越境の果てに、直接的な政治批判が死を意味する極限状況を体験した末に紡ぎ出された、極めて戦略的な言葉なのである。

III ユーモア・風刺的な「傍観者」としての戦後日本への批判

台湾からの逃亡を経て、陶晶孫はついにどの国民国家にも安住の地を持たない文字通りの「亡命者」となった。しかし彼は、後に『日本への遺書』として結実することになる一連の随筆において、この根無し草の境遇を単なる悲劇として受け止めるのではなく、むしろそれを逆手に取り、独自の批評的視座を確立するための戦略的な足場へと転換させた。台湾で体験した、剥き出しの国家暴力に対する根源的な不信から、彼は特定のイデオロギーに与する言説そのものを拒絶する必要があった。それが、本稿が彼の文学的実践を捉えるための鍵概念とする「亡命者のパフォーマンス」である。この「パフォーマンス」は、単なる奇をてらった表面的な装い（文学的ポーズ）ではない。それは、政治的言説がもたらす暴力や悲劇から距離を置き、人間性の真実を語り続けるための、切実な生存戦略であった。さらに、この生存への意志こそが、特定の政治的立場に回収されることを拒否し、日本社会の内部にありながら常によそ者として振る舞うことで物事の本質を鋭く抉り出すという、独自の表現戦略を彼に選択させたのである。

1. 「亡命者のパフォーマンス」の三つの指標

陶晶孫が展開したこのパフォーマンスは、単なる印象論ではなく、彼のテキスト全体に一貫して見られる具体的な手法として分析することができる。本稿では、その特徴を以下の三つの指標によって把握する。

一つ目は、不帰属の立場、つまり批評的距離の創出である。彼の文章は、日本、中国大陆、台湾のいずれの政治的語りにも与しない、絶妙な距離感を保つことを最大の特徴とする。彼は自らを「亡命者」と称することは稀であったが、その視線は常に複数の文化圏を往還し、どの場所にも完全には定着し得ない自己の立場を強く意識している⁽⁵⁾。この「どこにも属さない」という立ち位置こそが、彼の批評に安易な愛国心やナショナリズムに陥らない客観性と鋭さをもたらした。

次いで、権威を相対化する語彙の往復である。陶は、荘重な漢文的・儒教的語彙と、卑近で口語的な生活語彙を意図的に衝突させる手法を多用する。この古典と日常の往復は、読者が自明としている価値観を揺さぶる効果を持つ。古典語彙は、かつての日中共同の知的遺産への敬意を示

すと同時に、それを現代の文脈で茶化し、ずらして引用することで、その権威を相対化する武器ともなる。この言語遊戯的な態度は、彼の批評が硬直した道徳論に陥ることを防ぐための重要な文学的装置であった。

最後は読者との共犯関係を構築する受容設計である。彼のユーモアと風刺は、日本語を母語とする読者の文化的前提や読解の習性を深く理解した上で、周到に設計されている。彼は日本人読者が共感しやすい比喻や歴史的参照点を用いながら、その論理を反転させることで、読者に知的な驚きと内省を促す。これにより、彼の批評は一方的な外部からの断罪ではなく、読者が自らの問題として引き受けることを可能にする、開かれた対話の形式を取ることに成功したのである。

2. 随筆にみる文明批評——「落第した秀才」日本へ

このパフォーマンスが最も鮮やかに展開されたのが、彼が戦後日本で発表した一連の随筆であった。中でも、彼の名を文壇に知らしめた「落第した秀才日本」は、その代表例である。このテキストで陶は、明治維新以降、西洋の学問を驚異的な速さで吸収した日本を、誰もが認める「秀才」であったとまず肯定的に評価する。しかし、議論はここから鋭く反転する。彼は、その優秀な「秀才」が、自らの力を過信し、「戦わなければならない理由も、口実すらもなかった」日清戦争を引き起こしたことが、最大の過ちであったと指摘する。この行為がロシアやドイツといった帝国主義列強を中国に引き込む結果となり、最終的に自らの破滅（敗戦）の遠因を作ったのだと、冷徹な歴史的因果関係を突きつけた。彼の批評の核心は、近代日本の成功と失敗の因果関係を、冷徹な歴史的視座から解き明かした点にある。彼は、日本の優秀さを認めつつも、その力が誤った方向、すなわち帝国主義的侵略へと向かった瞬間にこそ、破滅の種子が蒔かれたと喝破する。

〔帝国主義的な〕日本は日清戦争を起し（これは戦わなければならない理由も、口実すらもなかったが）そのためロシア帝国やドイツ帝国を中国に導く結果となって、今度の敗戦の遠因を作ってしまった（陶 1952：45-47）。

ここで陶は、日清戦争を単なる過去の出来事ではなく、第二次世界大戦での敗戦へと至る歴史的連鎖の起点として明確に位置づけている。彼によれば、日本の行動はアジアにおける帝国主義の競争を激化させ、その結果、日本自身がその渦に飲み込まれたのである。この論理は、日本人自身の歴史観の死角を突くものであり、最終的にアメリカ軍の占領下にある日本の姿を、かつての半植民地状態の中国になぞらえるという痛烈な結論へと導かれる。

さらに、「中日友好のために」と題されたエッセイでは、過去への痛烈な批判に留まらず、未来の日本が歩むべき道をも示唆した。彼は、近代日本がアイデンティティの抛り所を西洋に求めすぎたと考え、その精神的な方位転換を力強く促す。「日本はもう一遍振り出しから進み、初めてアジアに戻る」という（陶 1952：40-43）。この有名な一節における「アジアに戻る」とは、単なる地理的・政治的な回帰を意味しない。それは、福沢諭吉以来の「脱亜入欧」の精神構造を根底から問い直し、かつて日中が共有していた漢文的教養のような文化的・思想的遺産に再び目を向けることで、アジアの一員としての主体性を再確立せよ、という文明史的な要求であった。

3. 同時代知識人による受容——「亡命者」という視点の発見

陶晶孫のこうした批評が、単なる外国人による日本批判として退けられず、むしろ深い共感を呼んだのはなぜか。その鍵は、竹内好をはじめとする同時代の日本人知識人が、彼の言葉の中に「亡命者」という特異な響きを聴き取った点にある。思想家・竹内好は、その書評で陶晶孫文学

の本質を見事に言い当てている。竹内 (1952) は「明治の日本のノスタルジアをふまえて今日の世相を嘆いている予言的な文章は、独特の風格と相まって、私たちの胸の奥にひびく」と指摘した。竹内のこの評価は、本稿の分析の核心をなす二つのキーワード、「明治へのノスタルジア」と「亡命者としての批評性 (予言的な文章)」を的確に捉えている。陶の言葉が力を持ったのは、それが単なる批判ではなく、日本人自身がかつて持っていたはずの理想 (明治) への愛情と喪失感に裏打ちされていたからである。この共感の基盤があったからこそ、彼の批評は日本人読者の「胸の奥にひびく」ことができたのである。

竹内が陶を明確に「亡命者」と呼んだことは重要である。それは、陶が戦後日本のイデオロギー (例えば、アメリカ主導の民主主義への無邪気な賛美や、過去の戦争責任に対する安易な自己否定) のいずれにも与せず、それらすべてを相対化する外部の視点を持ち続けていたことへの的確な評価であった。陶自身が、自身の逃亡者としての立場ゆえに一貫して直接的な政治談議を避けたことが、かえって彼の言葉に、特定の党派性を超えた普遍的な説得力を与えたのである。

つまり、陶晶孫は自らの書き方とその時代背景を深く自覚し、意図的に「亡命者」としての文化的なパフォーマンスを演じていた。その結果、彼は政治的な主張を声高に叫ぶのではなく、どの共同体にも完全には帰属しないという宙吊りの立場を体現することによって、戦後日本の言説空間に、これまで存在しなかった新たな批評的ポジションを創出したのである。

IV 明治時代へのノスタルジア

陶晶孫が展開した「亡命者のパフォーマンス」において、その批評的視座を支える重要な精神的支柱の一つとなったのが、「明治時代へのノスタルジア」である。「明治へのノスタルジア」は竹内好も言及した重要な概念だが、その具体的な内実は十分に明らかにされていない。そこで本稿は、竹内の指摘を引き継ぎつつ、このノスタルジアがいかなる意味を持つのかを掘り下げる。陶晶孫が懐古した「明治」とは、特定の歴史的時代そのものではなく、むしろ彼自身の原体験に基づいて理想化され、戦後日本を映し出すための批評的鏡として再構築された、一つの精神的風景であった。本稿は、このノスタルジアを、失われた理想への嘆きと未来への期待が交錯する、極めて戦略的な知的態度であったと位置づける。それは、帝国主義へと変質する以前の日本が持っていたはずの異文化に対する開放性や対話の可能性といった、戦後にも継承しうる精神的遺産を、戦後の廃墟の中から発掘しようとする試みであった。なお本稿で言う「明治へのノスタルジア」は、帝國的路線の復古を意図しない。ここで対象とするのは、当時なお作動していた古典の公共性と対話可能性という継承可能な文化資源に限られる。

1. 原体験としての明治——漢文教養と異文化共存

陶のノスタルジアの根源は、彼が 9 歳で来日し、多感な青年期までを過ごした明治末期から大正初期の日本社会での実体験に深く根差している。彼が受けた教育において、漢文は単なる外国語ではなく、国語教育の根幹をなす「古典」として教えられていた。このことは、当時の日本社会が、中国の古典文化を自らの文化の源流として尊重し、それを知の体系の基盤に据えていたことを意味する。このような環境で育った陶にとって、漢文的教養は、日本人と中国人という差異を越えて、知的・精神的なレベルで深くコミュニケーションすることを可能にする「共通言語」として、ごく自然に身体化されていた。

また、彼が青春時代を送った東京・神田界隈は、多くの中国人留学生が集まる一種のコスモポリタンの空間であった。後年の座談会で彼が「中國式の生活をしたい、日本式に慣れず、いろいろな滑稽なことがあった」と微笑みながら語る時、その言葉の背後には、異文化が摩擦や誤解 (「滑稽なこと」) を生み出しながらも、一つの社会の中で共存していた時代の活気と寛容さへの温かい眼差しがある (佐藤他 1951 : 61)。彼自身が、そのような日中文化の交差点で育ち、日本人と対等な友情を築き、日本人女性と結婚したという事実は、この時代の「開放性」が単なる理念ではなく、彼にとってのリアルな生活実感であったことを物語っている。

2. 座談会にみる態度の表明——戦略としての語りと沈黙

この複雑な感情のありようは、彼が亡命後の 1951 年 7 月に招かれた「三田文学会」の座談会の記録から、より具体的に読み取ることができる。この座談会には、佐藤春夫、竹内好、奥野信太郎といった、当代一流の知識人が顔を揃えていた。招待を受けるにあたり、陶が「政治的な話題に亘らないならば」という条件を提示したことは、彼の慎重な姿勢を象徴している(佐藤 1952: 2)。

記録を読むと、日本側の参加者が魯迅と周作人の関係や現代中国文学の動向といった、政治と不可分な話題に強い関心を示すのに対し、陶はそれらの問いに対しては終始慎重に言葉を選び、核心を巧みにはぐらかしている。これは、彼が亡命者としていずれの政治的立場にも与しないという態度を貫くための、戦略的な沈黙であったといえよう。

その一方で、ひとたび話題が自らの過去、特に創造社結成のきっかけとなった明治・大正期の日本の思い出に及ぶと、彼の語りは一転して生き生きとした熱を帯びる。日本の同人雑誌文化に触発されて創造社が生まれた経緯や、前述の神田の留学生たちのエピソードを、彼は懐かしさを込めて語る。ここには、彼が語るべきものと語らざるべきものを明確に峻別する、意識的な選択が見て取れる。彼は、政治的に対立する「現代」ではなく、文化的に共鳴し得た「過去(明治)」を語ることを選んだ。この座談会自体が、彼のノスタルジアが、戦後日本の言論空間において自らの立ち位置を確保し、メッセージを伝えるための洗練されたパフォーマンスであったことを示している。

3. 批評装置としてのノスタルジア——「アジアに戻る」ための参照点

同座談会に参加した竹内好が、後に陶の文章を「明治の日本のノスタルジアをふまえて今日の世相を嘆いている」と的確に評したように、陶のメッセージは当時の知識人層に確かに届いていた。陶が提示した「明治」は、単なる美しい思い出の対象ではない。それは、その後の日本が帝国主義へと突き進む過程で失ってしまった精神、すなわち、アジアの一員としての自覚と、異文化に対する開かれた姿勢を、戦後日本が取り戻すための批評的な参照点であった。

彼は、帝国化の萌芽を看過していたわけではない。随筆「落第した秀才日本」が示すように、彼は甲午戦争から敗戦に至る帝国主義の論理的帰結を明確に批判している。彼が回帰を呼びかけたのは、軍国主義へと至る政治体制としての明治ではなく、そこで育まれた「対話可能性」という継承可能な文化的遺伝子であった。

戦後、「連合国軍総司令部(GHQ)」による「民主主義」の導入が一種の熱狂をもって迎えられる一方で、竹内好のような知識人は、そのアメリカ的価値観への無批判な追従に危機感を抱き、アジア主義の再検討などを通じて日本の主体性を模索していた。このような知的状況において、陶晶孫が「亡命者」という外部の視点から提示した「明治への回帰」と「アジアに戻る」という呼びかけは、彼らにとって、戦後日本の進むべき道を考える上で極めて示唆に富む、新たな視座を提供するものだったのである。

しかし、その「開放性」へのノスタルジアは、帝国主義日本と相対せざるを得なかった彼自身の裂け目を免罪するものではない。以下では、その葛藤がいかに彼の語りを鍛え上げたかを跡づける。

V 帝国主義日本との葛藤

陶晶孫が明治の「開放性」に希望の光を見出していたとすれば、その後の大正、昭和期に日本が突き進んだ帝国主義の道は、彼に深い幻滅と葛藤をもたらす影であった。理想と現実のあまりの乖離は、彼の内部に引き裂かれた自己意識を生み出し、その後の文学作品における鋭い批評性と、人間や社会に対する一筋縄ではいかない複雑な眼差しの源泉となった。彼の「亡命者」としてのパフォーマンスは、この帝国との屈折した関係を抜きにしては理解できない。

1. 「対支文化事業」の担い手というジレンマ

陶の葛藤が明確な形を取り始めるのは、1923 年の「対支文化事業」開始以降である。これは、義和団の乱の賠償金の一部を資金とし、日中間の学術・文化交流を促進することで中国の対日感情を和らげることを目的とした、日本の外務省主導の国策であった。表向きは文化的な友好を掲げながらも、その実態は日本の文化的影響力を浸透させ、大陸における権益を確保しようとする、いわゆる「文化侵略」の側面を色濃く持っていた。

1926 年、陶晶孫はこの事業の一環として、文部省からの学費支給を受ける特別選抜留学生として東京帝国大学で学ぶ機会を得た（中村 2013：25）。彼は、日中交流の象徴的存在として、日本側から大きな期待を寄せられる立場に置かれた。しかし、その知性ゆえに、彼はこの事業が持つ欺瞞性を敏感に察知していた。親日的知識人としての役割を期待され、演じながらも、内心では日本の帝国主義的野心に強い警戒感を抱くという深刻なジレンマに苛まれた。この時期に培われた、公的な顔と内面との乖離、そして権力が構築する「友好」の物語を冷徹に見つめる視線は、彼のその後の人生と文学を決定づけることになる。

2. 戦時下上海での生存戦略と抵抗

1937 年の日中全面戦争の勃発は、彼のジレンマを極限状況へと追い込んだ。家族の安全を第一に考え日本へ避難させた後、彼自身は戦火の上海に留まり、日本の研究機関である上海自然科学研究所で働き続けることを余儀なくされる。彼は、その卓越した語学力と科学的知識、そして日本人社会への深い理解から、日本の占領当局にとって極めて有用な人材と見なされた。

日中文化協会の要職に就き、日本の文化人との交流を続ける一方で、彼は日本軍の侵略行為に対して強い反感を抱き続けていた（佐藤 1999：144-148）。彼の立場は、常に薄氷を踏むような危うさに満ちていた。特に、1944 年に南京で開催された第三回大東亜文学者大会への参加を強要された経験は、彼の葛藤を象徴する出来事であった。日本の戦争遂行を正当化するためのプロパガンダの場であったこの大会で、彼はあえて中国の知識人が直面する苦悩を吐露し、日本の作家たちの反感を買った。これは、絶望的な状況下で見せた、ささやかながらも尊厳をかけた内なる抵抗の表明であった（陶 1944；中村 2019：60-84）。彼は、帝国主義の政策に呑み込まれ、利用されながらも、その内側で自己のアイデンティティを保とうと、常に複雑な生存戦略を駆使し続けていたのである。

3. 文学的応答としての「淡水河心中」

この帝国主義日本との長く屈折した関係は、亡命後の彼の創作活動に、深い影を落とすと同時に、比類のない批評的な鋭さをもたらした。その最も優れた結実が、短編小説「淡水河心中」である。本作は、戦後間もない台湾で実際に起きた、外省人男性と本省人女性の心中事件に着想を得ている。しかし、陶の目的は単なる事件の再現ではない。彼はこの事件をプリズムとして、日本の植民地支配が残した複雑な文化的・社会的後遺症と、それに起因する戦後台湾社会の軋みを鮮やかに描き出した。

物語は、日本語を解する「外来者」である語り手の視点から、戦後もなお人々の生活の隅々に日本的なものが深く根付いている台湾の日常を描写する。本省人が話す日本語混じりの言葉、日本式の家屋、生活習慣。これらは、単なるノスタルジアの対象ではなく、50 年にわたる植民地支配がもたらした、容易には消し去ることのできない歴史の刻印である。物語は、この文化的な断層の上で繰り広げられる、外省人（戦後中国大陸から渡ってきた人々）と本省人（それ以前から台湾に住む人々）との間の見えざる緊張関係を、恋愛という個人的なドラマを通して浮き彫りにする。

しかし、陶晶孫の筆致の卓越性は、社会問題の原因を日本の植民地主義や国民党政府の失政といった単一の主体に帰するような、安易な政治的断罪を徹底して回避している点にある。彼の批評的視線は、むしろ個人の悲劇を特定の政治的物語（ナラティブ）へと回収し、利用しようとする権力作用そのものに向けられる。その批評的精神が最も凝縮されているのが、事件を「記念碑」によって美談に仕立て上げようとする学校側の動きを、作中の助教授が冷笑する以下の台詞である。

其處だ、校長の頭は政治家の頭だよ、教育家じゃない。中國内地人のために臺灣の娘が自殺することになった。日本人に生蕃〔台湾の先住民のこと〕娘をかすめられたので生蕃は蜂起した、二二八事件も引きおこした。民族は民族を恐れる、貞節は別として政策だ。建碑と云う滑稽は君、実現するよ (陶 1952: 131)。

この「建碑と云う滑稽」という一節は、本作の批評的核をなす。それは、個人の複雑な悲劇を「民族」や「政策」といった単純化されたコードへと還元し、固定化しようとするあらゆる権力の欲望に対する痛烈な批判として機能する。さらにこの視座は、陶自身が体験した二つの権力作用、すなわち日本の帝国主義プロパガンダ (大東亜文学者大会) と国民党のナショナリズム (台湾での「祖国」教育) への、本質を見抜いた二重の批判でもあるのだ。作中で本省人少女が外省人男性に弄ばれる様を、国民党政府が台湾に「愛国」のイデオロギーを注入する過程の寓話として読むならば、陶は、いかなる「正義」の物語にも与しないことで、歴史の複雑性そのものを守ろうとしたと言える。

この、いかなる固定的ナラティヴにも与しないという態度こそ、陶晶孫が長年の葛藤の末に体得した「亡命者のパフォーマンス」の真骨頂であった。彼は、日本、中国、台湾、そのいずれの「正義」にも迎合しない「どこにも属さない」視点を堅持することで、戦後東アジアの複雑な現実を、その矛盾に満ちたありのままの姿で描き出すことに成功した。「淡水河心中」は、彼が帝国主義との個人的な葛藤を、より普遍的な「物語の政治学」そのものへの根源的な批評へと昇華させた、記念碑的な作品なのである。

VI 最期の小説にみる明治・大正時代と漢文による日中交流の可能性

陶晶孫がその生涯の最後に遺した二篇の小説、「セントラルサプライの泥棒」と未完の絶筆「漢文先生の風格」は、単なる未完の断章ではない。それらは、彼が亡命後の思索の全てを注ぎ込み、隨筆で理念的に提示してきた文明批評を、具体的な人間の営みと感情が息づく物語へと昇華させた、彼の文学的遺言である。戦争とイデオロギーによって引き裂かれた日中関係の再生という困難な問いに対し、彼は国家や政治というマクロな次元から離れ、個人の生活倫理と日常的なコミュニケーションというミクロな次元にこそ、その可能性の萌芽があることを見出した。本章では、これら最期の小説群を精読し、彼が失われた「共通言語」を、文学的想像力によっていかにして再構築しようとしたのか、その方法論を明らかにする。

1. 歴史的記憶のプリズム——郭沫若というモデル

両作品が、陶の義兄であり近代中国を代表する知識人・郭沫若の若き日の日本留学時代を素材としている点は、陶の企図を読み解く上で決定的に重要である。郭沫若自身が、明治・大正期の日本の「開放性」の中で日本人と深く交流し、日本人女性 (佐藤富子) と結ばれ、そして日本の同人雑誌文化に触発されて文学結社「創造社」を創設したという、まさに日中文化の創造的融合が生んだ象徴的存在であったからだ。陶は、この郭沫若という具体的な歴史的記憶をプリズムとし、かつて存在し得た、そして未来において再び可能かもしれない関係性の理想像を、小説というフィクションの形で再構築しようとした。

特筆すべきは、両作品ともに郭沫若自身を直接の主人公とするのではなく、彼を取り巻く日本人、すなわち看護婦である「おたみさん」 (佐藤富子がモデル) や、近所に住む市井の「漢文先生」にこそ、語りの焦点を当てている点である。この意図的な視点の選択は、陶の関心が、異国で成功する中国人エリートの物語ではなく、むしろ平凡な日本人がいかにして異文化としての中国 (人) を受け入れ、対等で人間的な関係性を築いていったかという、相互作用のプロセスそのものに向けられていたことを力強く示唆している。より重要なのは、これが郭沫若自身によるロマン主義的で自己中心的なテキスト群 (例えば書簡集『三葉集』や小説『落葉』) に対する、意識的な「応答」あるいは「修正」としてのパフォーマンスであったという点である。陶は、郭沫若が構築した物語を静かに解体し、周縁に置かれた日本人女性や市井の人々を主役に据え直す

ことで、歴史の別の可能性を提示しようとしたのである。それは、国家によって動員される「友好」ではなく、個人の内発的な意志と倫理に基づく関係性の探求であった。

2. 「セントラルサプライの泥棒」——国際関係から日常倫理への翻訳

「セントラルサプライの泥棒」は、日中関係という壮大な主題を、病院の「中央材料室」という、極めて限定的で機能的な裏方の空間へと大胆に持ち込む。この舞台設定自体が、陶の批評的視線を象徴している。彼が描こうとしたのは、華やかな外交の舞台ではなく、人々の生活が営まれ、物資が欠乏し、規則と人情がせめぎ合う、ありふれた現場であった。

物語の中心は、主人公の日本人看護婦「おたみさん」が示す、状況に応じた倫理的判断である。彼女が、不足する医療品を融通するために規則を逸脱する行為（＝盗み）は、道徳的な罪としてではなく、制度（病院の規則）と人情（目の前の患者を救いたいという切実な思い）の狭間で、最善を尽くそうとする現場固有の「局所的な倫理」の実践として、温かい眼差しをもって描かれる。これは、普遍的で抽象的な正義を振りかざすのではなく、具体的な状況の中で悩み、判断する個人の倫理的営為を肯定する、陶の一貫した姿勢の表れである。

ここで注目すべきは、この能動性が郭沫若『落葉』等に見られる受動的な献身としての日本人女性像と鮮明な対照をなす点である（喬 2025）。郭沫若のテキストでは周縁化され、声を持たなかった日本人女性に、陶は主体性と内面を与え、物語の中心へと「召喚」したのである。これは、中国人留学生のナショナリズムの視点から描かれがちであった従来の日本人女性像を打破する、意欲的なパフォーマンスであった。

陶の批評的パフォーマンスは、単に日本人女性像を再構築するに留まらない。それはさらに踏み込み、モデルとなった郭沫若自身が構築したロマン主義的な自己像そのものに向けられた、微細な語りの操作をも伴う批評的介入であった。その最も象徴的な場面が、中国人留学生がおたみさんに送った恋文のくだりである。

小説において、留学生は「はじめてあなたを病院の玄関で見たとき、私は丁度マドンナを見るような心持ちがしました。あなたの顔の後ろには御光がさしていました。…あなたの口は櫻の實のようでした」と、聖化と感覚的比喻を重ねる、極めて詩的で荘重な言葉を連ねる（陶 1952: 100-101）。しかしテキストは、この高揚した抒情を、受け手であるおたみさんの即座の反応によって脱臼させる。彼女は感動するどころか、逆に笑ってしまい、「恋文だわ、私に恋するなんておかしいわ、でもかわいそうな学生だわ」と、その過剰な表現を冷静に突き放すのである（陶 1952: 101）。ここで提示されるのは、送り手の構築する詩的な自己像と、受け手の抱く日常的な判断との間の決定的なズレであり、荘重な修辞は読者が共有しうる軽い可笑しみへと巧みに転換される。

しかもこの恋文の筆致は、郭沫若自身のテキストにおける自己演出を踏まえた、意図的な模倣と転換として読み解くことができる。郭（1990: 40）は書簡集『三葉集』の中で、初対面の安娜（佐藤富子）について「僕は彼女の眉目の間に、ある不思議な清らかな光があるように感じた」と記し、自らの恋愛を神聖な出来事として演出していた⁽⁶⁾。「セントラルサプライの泥棒」の恋文は、この自己神話化のレトリックを日本語の文体レベルに置き換えつつ、それを受け手の素朴な一笑によって批評的に反転させる。すなわち、権威的な抒情と日常的な独白との間を往還する語彙の往復が、日本人読者の感受性を前提とした受容設計によって、感動ではなく軽い失笑という期待の反転として、巧みに演出されているのである。

この場面操作が持つ効果は二重である。第一に、男性主体の過剰な抒情が、女性受け手の即興的で現実的な判断によって相対化され、本作がめざす日本人女性の主体性が、語りのミクロな次元で鮮やかに可視化される。そして第二に、より重要なのは、作者・陶晶孫が、中国側ロマン主義の自己演出に与することなく、かといってそれを単なる嘲笑に回収することもない、絶妙な不帰属の批評的距離を維持している点だ。彼は、このズレがもたらすユーモアを媒介として、読者との間に批評的な共犯関係を編成するのである。まさしくここにおいて、本稿が随筆分析で提示した三つの指標、つまり不帰属の立場、語彙の往復、受容設計が、小説という形式における具体的な場面操作として、見事に具現化されているのだ。

そして物語の終盤、語り手は主人公おたみさんの人生が、公的な歴史には記録されない別の種

類の貢献であったことを示唆し、次のように静かに総括する。「おたみさんは看護婦から離れ、看護事業もしたわけではないから引き合いには出したくない。しかしその天性が別な方面から中国のため偉大さを持った」という(陶 1952:101)。ここで語られる「偉大さ」とは、歴史に名を残すような英雄的な行為や、国家・イデオロギーの言葉で語られる公的な功績では断じてない。それは、制度の隙間で発揮される個人のケアの倫理であり、国境を越えた具体的な個人への扶助と信頼によって、人間的な関係性のネットワークを紡ぎ出す力なのである。陶はこの作品を通じて、とかく政治的に語られがちな「日中関係」という抽象的な概念を、血の通った個人同士の倫理的な関係性へと見事に翻訳してみせた。結びのこの一文にこそ、作品が提示する理想像が力強く凝縮されているのである。

3. 「漢文先生の風格」——「共通言語」の生活技法への転換

未完ながらも彼の思想の核心を凝縮して示す遺作「漢文先生の風格」は、郭沫若の自伝的小説『月蝕』(1923)を批評的な下敷きとした、極めて洗練された応答＝パフォーマンスである。『月蝕』において、漢文先生(二木)は偏屈で保守的な人物として平板に描かれ、最終的に誤解から主人公たちとの関係を断絶してしまう。しかし陶は、この人物像を意図的に改造する(劉 2009; 喬 2025)。陶が描く漢文先生(逸龍)は、モーパッサンの禁書を読むなど進歩的な思考を持ち、ユーモアと情味に富む、複雑で魅力的な人物として造形されている。この人物像の転換は決定的である。陶は、『月蝕』におけるコミュニケーションの失敗という悲劇的な結末を乗り越え、漢文的教養が断絶ではなく、むしろ異文化理解と家庭内の親密な対話の触媒となりうるという、理想的なヴィジョンを提示したのだ。

このヴィジョンが凝縮されているのが、物語のクライマックス、すなわち漢文先生である父親が、娘のてるちゃんに自らの恋愛譚を、孔孟の「礼」という古典語彙を用いて遠回しに説く場面である。

てるちゃんは初めてきく自分の母のロマンスにいたずらそうに眼を光らしていた。

「人間生活だ、いろいろ感情と理性がもつれる、感情でゆけばあまりに体裁のわるいことをおこす、理性でゆけば堅くなって自分を苦しめる、これが孔孟の礼だ、時には我慢が大事だ、これが人間の風格と言うものだ、人間は食う時だけ食う、いつも口を動かすとか、よだれが出ていては犬のようになる、腹がへつても食事迄待っている、これまた礼である、だから孔子様は礼に非ずんば食わずと言われたのだ。」

「そう、おむすびを開けていい。」

父は哄笑した、父はこれで娘に遠まわしに男女交際を教えたつもりである。娘は併し未だ試みぬ恋愛と読みすぎた小説の間にギャップがある(陶 1952:126)。

この絶妙な対話は、多層的な分析を可能にする。まず、父親の語りは、古典の権威を家庭内の私的な領域(恋愛)へと接続し、それを現代的な倫理として伝えようとする、古典を日常の文脈へと開く試みである。しかし、この荘重な語りは、娘の「おむすびを開けていい」という、素朴で身体的な、現在形の欲求によって意図的に脱臼させられる。ここに、漢籍語彙(礼・風格)という父権的・歴史的コードと、生活語彙(おむすび)という娘の身体的・現在的コードとの鮮やかな拮抗、そしてそれゆえの創造的な融合が生まれる。

この瞬間、古典は、もはや上から押し付けられる絶対的な規範(正解を指し示す「辞典」)であることをやめ、世代間、そして(中国人留学生「ケー君」の存在が暗示する)文化間の関係性を、笑いを交えながらしなやかに調整し、交渉するための柔軟な生活の技法のレパートリーへと姿を変える。陶は、例えば『論語』顔淵篇の「非礼勿視、非礼勿聴…」という厳格な句法を、意図的に「食」という卑近なテーマへとずらして戯画化しつつ援用することで、厳粛な古典を「用の言葉」へと解放する。

この古典の意図的なずれた再利用こそ、彼の「亡命者のパフォーマンス」の言語的実践の極致であった。それは、古典への深い教養(インサイダー性)と、それを絶対視しない批評的距離(アウトサイダー性)を併せ持つ亡命者だからこそ可能な、洗練された文学的装置なのである。陶晶

孫が最期に描き出したのは、明治・大正期の文化遺産を、ノスタルジックに保存するのではなく、生活の実践の中で絶えず更新し、未来の対話のために再創造していくという、動的なビジョンであった。

VII おわりに

本稿は、作家・陶晶孫が 1950 年から 1952 年にかけての亡命期に日本で遺した作品群を、単なる文学的遺産としてではなく、一個の知識人による時代への応答、すなわち「亡命者のパフォーマンス」という名の、周到に企図された知的・倫理的実践として読み解くことを試みた。彼の生涯は、近代日本の光（明治期の開放性）と影（帝国主義）との間で引き裂かれた、痛切な葛藤の軌跡であった。この経験こそが、彼の文学に、いずれの国民国家の語りにも回収されないことのない、孤高にして鋭い批評的視座を授けたのである。

本稿が明らかにしたように、陶晶孫は自らが置かれたよそ者としての立場を逆手に取り、ユーモアと風刺を精緻に編み込んだ文学的パフォーマンスを展開した。彼が繰り返し参照した「明治時代へのノスタルジア」は、決して感傷的な過去への逃避ではなかった。それは、その後の日本が帝国主義の道程で失った「開放性」と「対話可能性」という理想を、戦後の精神的廃墟の中から発掘し、未来への参照点として提示するための、極めて戦略的な批評装置であった。

そして、随筆において理念的に示された「アジアに戻る」という文明批評的な呼びかけは、遺作となった小説「セントラルサプライの泥棒」と「漢文先生の風格」において、見事なまでに具体的な生活の場面へと翻訳・具現化された。本稿が特に光を当てたのは、彼がかつて自明であった日中間の「共通言語」を、文学的想像力によって意図的に再構築しようと試みた点である。彼の小説世界において、漢文や儒教といった権威ある古典語彙は、その荘重な殻を脱ぎ捨て、家庭や職場といった日常の現場へと生活語化される。そこで古典は、絶対的な規範から、異文化間の関係性を、ユーモアを交えて調整し、交渉するための、柔軟で創造的なコミュニケーションの技法へと再生された。

結論として、陶晶孫の亡命期のテキストは、戦争やイデオロギーによってもたらされた深刻な文化的断絶の後、人々はいかにして再び対話の言葉を取り戻しうるのか、という根源的な問いに対し、文学が担いうる一つの力強い答えを提示している。本稿の学術的貢献は、以下の三点に集約できるだろう。第一に、陶の「懷古」を、戦後日本への批評的メッセージを込めた戦略的パフォーマンスとして再定義した点。第二に、彼の小説における古典語彙の生活語化という独自の手法を析出し、それが「共通言語」の再創造という企図を持っていたことを明らかにした点。そして第三に、郭沫若の先行テキストとの比較分析を通じて、陶の小説創作が単なる回想ではなく、既存の物語への批評的介入＝パフォーマンスであったことを実証し、従来「架け橋」といった抽象的な比喻で語られがちであった日中文学交流の様相を、より具体的な実践レベルの言語使用に基づく日常の営みとして捉え直す視点を提示した点である。

陶晶孫の文学は、没後 70 年以上を経た現代においても、その輝きを失っていない。ナショナリズムの論理が再び世界を覆い、文化的な相互不信が蔓延する現代において、彼が示した、国家という大きな物語から距離をとり、個人の倫理と生活の実感から出発して異文化との関係を紡ぎ直そうとする姿勢は、かつてなく重要な示唆に富んでいる。彼の作品は、文化的亀裂を乗り越えるための具体的な思考と、しなやかな精神のあり方を、我々に示し続けているのである。それは、「中国人」「日本人」といった国籍意識や、特定の政治的イデオロギーによって課せられた役割を脱ぎ捨てるだけでなく、さらに一步進んで、人間性の真実を語るための役を自ら選び取り、演じることの重要性を示唆している。この知的誠実さこそ、彼の「亡命者のパフォーマンス」が現代に投げかける最も普遍的な問いかけであろう。

最後に、陶晶孫の批評が、単なる個人的な感慨に留まらず、戦後日本の思想史全体にとってどのような意味を持ち得たのかを、伊藤虎丸の言葉を借りて確認しておきたい。伊藤は、陶の文明批評を、日本の近代化そのものが抱える課題への根源的な問いかけとして捉えた。伊藤は次のように語っている。

日本の「戦後」改革は、明治の開国につぐ「第二の開国」と呼ばれる。…陶晶孫の『日本への遺書』での日本に対する「文明批評」はまさしくこの「形而上学的な罪」の指摘であり、日本近代の精神の在り方への批判だった（伊藤 1995：230-231）。

伊藤の指摘するように、陶の「亡命者」としての声は、明治以来の日本の近代化が、西洋文明の「精神」を学ぶことなく技術や制度の模倣に終始したという「形而上学的な罪」を、外部から鋭く突きつけるものであった。彼の文学は、戦後日本が真の「第二の開国」を果たすために、何を内省すべきかを問いかける、普遍的な力を持っていたのである。

今後の課題としては、本稿で論じた彼の文学的实践が、同時代の日本の読者層や文壇に具体的にどのような影響を与えたのかを、受容史の観点からさらに実証的に跡付けていくことが挙げられる。また、彼のテキストに見られる医療や看護といった場面設定を、当時の社会史的な文脈の中に置き直すことで、その批評性の射程をより立体的に解明することも、残された重要な研究テーマであろう。

付記 本稿は、松下幸之助記念志財団の研究助成（23-G50）、JSPS 科研費（JP24K22499）の助成を受けたものです。

注

- (1) 伊藤虎丸は次のように語っている。「戦前、日本と中国との文学の間には、親しい交流があり、共通の言葉のある時代があった。陶晶孫はその時期の日本留学生である。戦後、「日本への遺書」に寄せられた広く深い共感、その共通の言葉の上に、新しい中国の革命精神の初心と新しい日本の民主主義の出発点となった「反省」とが共鳴し合うことが出来た時代の証である。それは今日の日中関係の基礎として受け継ぐことのできるものである」。
- (2) 陶晶孫の経歴については、鄭仁佳 1997〈陶晶孫（1897-1952）〉《伝記文学》70（5）、144-148 頁；陶坊資 1998〈陶晶孫年譜〉張小紅編《陶晶孫百歲誕辰紀念集》（上海）百家出版社、223-231 頁；黃英哲 2016《漂泊与越境：兩岸文化人的移動》（台北）国立台湾大学出版中心、109-142 頁；岡田英弘 2021『漢字とは何か』藤原書店、229 頁を参照。
- (3) 「一氣がつくと私の身近からいろいろな人がもういない、みな夫子の云う通り危邦を去った。キンリュ〔陳金龍、台湾大学熱帯医学研究所助手〕が来ていろいろなことを知らせた、私は井戸の中から颶風をまきおこす気はない、匍い出るだけでたくさんだ。交通公社から書類がまわって来た、間違って同行の一人の名が新聞に出た、彼は「君日本へゆくのか」ときかれた、急がなければならん。〔中略〕ステップを上った、すぐ飛んだ、数えたら十日の間にすべては運んだ、恐ろしい疲れがやがて私を一年位痛めるだろう」という（陶 1952:65-66）。
- (4) 「私は学生運動に参加し、仲間たちと共に遠慮なく過激な発言を行ったことがある。父は常に私たちに対して、感情的になり過ぎず、一時の快感のために自分を危険に晒すべきではないと説得した。逮捕されれば澎湖列島に送られ重労働を強いられ、革命にとって不利になると警告していた。1948 年から 1949 年にかけて、学生運動は非常に活発で、急進的な学生が頻繁に失踪し、時には彼らの遺体が川面に浮かぶこともあった。父はこのような出来事に深く心を痛め、憤慨していた」という（陶 1998：17-18）。
- (5) それはおそらく、1952 年 2 月に陶が亡くなるまでの日本社会では、中国系亡命者をめぐる激しい議論がまだ起きていなかったためと考えられる。しかし、陶が亡くなった後、友人の須田禎一（1998）、竹内好（1952）、中澤孝之（1998）は陶の来日を「亡命」や「亡命のよう」な状態とした。また、澤地久枝（1998）はそれ「政治避難」と呼び、読売新聞の編集部の担当者は陶を台湾からの「脱出」した者と呼んだ（『読売新聞』1953 年 3 月 17 日）。
- (6) 喬亜寧（2025）もこの対応関係を指摘しているが、本稿は、この借用が単なる参照に留ま

らず、郭沫若の自己像に対する意図的な「反諷化」という批評的機能を持っていた点を強調する。ここでいう「反諷化」とは、『三葉集』に見られる自己神話化的抒情を日本語の高様式へと模写したうえで、受信者（おたみさん）の即時的・日常的反応によってその権威性を脱臼させる語りの操作を指す。

引用・参考文献

和文文献

- 伊藤虎丸 1995 「【解題】戦後五十年と『日本への遺書』」 陶晶孫『日本への遺書』東方書店、209-239 頁。
- 岡田英弘 2021 『漢字とは何か』藤原書店。
- 大鹿卓 1948 『梅花一両枝』洗心書林。
- 喬重寧 2025 「『國』の服を脱ぐ：陶晶孫晩年の小説における日本人像」『野草』114、172-192 頁。
- 佐藤春夫 1952 「陶晶孫先生が遺著のために」 陶晶孫『日本への遺書』創元社、2-3 頁。
- 佐藤春夫他 1951 「陶晶孫氏を囲む座談会」『三田文学』復刊 3、58-71 頁。
- 佐藤竜一 1999 『日中友好のいしずえ：草野心平・陶晶孫と日中戦争下の文化交流』日本地域社会研究所。
- 鈴木将久 2012 『上海モダニズム』中国文庫。
- 竹内好 1952 「陶晶孫の日本への遺書」『朝日新聞』1952 年 11 月 3 日。
- 陶晶孫 1952 「危邦より乱邦へ」『日本への遺書』創元社、65-66 頁。
- 1952 「落第した秀才日本」『日本への遺書』創元社、45-47 頁。
- 1952 「中日友好のために」『日本への遺書』創元社、40-44 頁。
- 1952 「淡水河心中」『日本への遺書』創元社、128-139 頁。
- 1952 「セントラルサプライの泥棒」『日本への遺書』創元社、94-101 頁。
- 1952 「漢文先生の風格」『日本への遺書』創元社、102-127 頁。
- 中村みどり 2013 「『対支文化事業』と陶晶孫——特選留学生としての軌跡」『中国研究月報』67 (5)、14-31 頁。
- 2019 「日本占領下上海における陶晶孫の言説——大東亜文学者大会と「老作家」・「狗」」『野草』102、60-84 頁。
- 「編集手帳」 1953 年 3 月 17 日『読売新聞』。
- 劉建雲 2009 「岡山時代の郭沫若——地元市民とのふれあいをたどりながら」『人民中国』2009 年 8 月 26 日、URL : http://www.peoplechina.com.cn/zhongrijiaoliu/2009-08/26/content_213631.htm [最終アクセス：2025 年 4 月 10 日]。

中文文献

- 王滢華 1998 〈被人淡忘与歪曲的陶晶孫〉張小紅編《陶晶孫百歲誕辰紀念集》（上海）百家出版社、42-49 頁。
- 中澤孝之 1998 〈中国人对日本的卓越評論〉張小紅編《陶晶孫百歲誕辰紀念集》（上海）百家出版社、213-214 頁。
- 吉田富夫 1998 〈落第秀才——日本〉張小紅編《陶晶孫百歲誕辰紀念集》（上海）百家出版社、204-206 頁。
- 武継平 2013 〈陶晶孫《日本への遺書》の版本考察〉《国際社会研究：福岡女子大学国際文理学

部紀要》2、13-32 頁。

陶坊資 1998〈陶晶孫年譜〉張小紅編《陶晶孫百歲誕辰紀念集》(上海) 百家出版社、223-231 頁。

陶易王 1998〈父親在台灣〉張小紅編《陶晶孫百歲誕辰紀念集》(上海) 百家出版社、16-18 頁。

陶晶孫 1944〈期望文學者大會〉《新申報》1944 年 10 月 19 日。

黃英哲 2016《漂泊與越境：兩岸文化人的移動》(台北) 國立台灣大學出版中心。

須田禎一 1998〈陶晶孫其人及作品〉張小紅編《陶晶孫百歲誕辰紀念集》(上海) 百家出版社、150-165 頁。

鄭仁佳 1997〈陶晶孫(1897-1952)〉《伝記文学》70 (5)、144-148 頁。

澤地久枝 1998〈具有里程碑意義的人物〉張小紅編《陶晶孫百歲誕辰紀念集》(上海) 百家出版社、145-149 頁。

濱田麻矢 1996〈文化的“混血兒”——陶晶孫與日本〉《中國現代文學研究叢刊》68、227-235 頁。